

新しい「プロレタリア文学」

倉 田 稔

もくじ

- 1 『来群』から
 - 2 小林多喜二・中国での国際検討会から
 - 3 井上ひさし
 - 4 松本清張
 - 5 アンチ・テーゼとしての司馬遼太郎
- おわりに

1 『来群』から

私はかつて「民主文学について」として『来群』（小樽・民主文学）に、次のように書いた。

プロレタリア文学がかつて日本にあった。最も盛んだったのが、昭和初期であり、むしろ頂点は日本ではその時だけである。その代表者は、小林多喜二、中条百合子、徳永直の『太陽のない町』である。これらは、時代が生んだものである。この勢いはたいしたものであって、例えて云えば、芥川龍之介が自分の文学に絶望した理由となった（参考、宮本顕治「敗北の文学」、松本清張「芥川龍之介の死」）。プロレタリア文学が新しい魅力のあるジャンルとして登場したのだった。その後、日本のプロレタリア文学は、治安維持法によって弾圧された。戦後はそして最近、プロレタリア文学は民主文学と云われた。

プロレタリア文学の本質は、社会の矛盾をつくものである。文学とは、その作品への同感、感激、感動、心を豊かにすること、カタルシスを得ること、などが本質である。これらを仮に、以下、面白さと云おう。プロレタリア文学も文学なので、そうあるべきである。

小林多喜二がかつて渡辺順三に云ったように、「ちかごろの短歌はつまらないよ」という発言（渡辺順三の、自伝）に注目すべきである。短歌を作るには、世界的大文学を読むこと、思想書を読むことが、必要である⁽¹⁾と、小生は書いたが、民主文学派の小説を作る場合も同じである。そして多喜二は、東京の監獄で差入れて貰ったフランス文学などを読んだ後、具体的に言えば、ディケンズやバルザックを読んで、「ぼくたちの作品が、・・・(小説どころか)綴方位でしかなかった」と書いた⁽²⁾が、その意味をよく考えるべきだろう。フランスの小説やロシアの小説（例えば、ユーゴー、デュマ、ドストエフスキー、トルストイ）は、小説の本道をゆくが、それくらい面白いものを書くべきだろう。

この問題と関わっているのは、日本の文学が私小説が主だったこと⁽³⁾、またスケールの大きい小説は書けないこと⁽⁴⁾、精神小説が好きだ⁽⁵⁾という事情がある。だがこれはここでは論じない。⁽⁶⁾

ブルジョア文学は、何でもテーマにし、何でも書ける。だからそれだけでも小説を面白いものにできる可能性が大きい。一方、プロレタリア文学は何でも書けるわけではない。だからそれだけにむずかしい。しかしプロレタリア文学には、それだけ独得の面白さがある。ブルジョア文学

に飽きてしまい、プロレタリア文学に面白さを求める場合がある。例えば、運動家と官憲の闘いなどは面白いものである。感動的な例として、中国の小説『紅岩』がある。

プロレタリア文学から民主文学への移り行きには、根拠がある。社会が変わったのである。社会学的に言えば、大衆社会が登場した。経済的に言えば、生産力の発展により階層が変化した。ホワイト・カラー、会社員、セールスマン、知識階層が増大した。第1・2次産業人口が急減した。かつてのように、働く人が労働者・農民だけというわけではなくなった。この新しい人々も、新しい生活、働く生活を持っている。彼らが、国を支えている。例えば、教員もそうである。日本の作品では、石川達三の『人間の壁』がすでにある。セールスマンの悲哀は、アーサー・ミラーが描いている。現在では、ストレートに階級闘争、小作争議、労働運動を書くだけでは足りない。多面的な勤労者の生活と世界が登場している。それらを文学でつかまえる必要がある。1999年の小樽多喜二祭での講演者も、既成の現今の小説にそういうものが沢山ある、と語った。民主文学という概念を拡大する必要がある、今ある。

(1) 拙書『大塚金之助論』成文社 59ページ。

(2) 小林多喜二の1931年1月13日、蒔田榮一あて手紙から。

(3) 漱石でさえ、「猫」「坊っちゃん」「草枕」は、私小説である。

(4) 例外は、中里介山の「大菩薩峠」、辻邦夫の「背教者ユリアヌス」。井上ひさし「吉里吉里人」、古くは、「南総里見八犬伝」や「竹取物語」。

(5) 漱石が愛される理由である。

(6) 小生は、ウィーンで、中国の華僑の夫人と話しをして、この問題を出した。同女史は、日本と中国とヨーロッパでの生活が長い。彼女いわく、中国は歴史と規模が大きく、それで大河小説が生まれるのです、と。(『来群』より。本文はそのまま、注は加筆)

2 小林多喜二・中国・河北大学での国際検討会から

2008年9月、オクスフォード大学で「小林多喜二記念シンポジウム」が開かれた。この報告集は、『多喜二の視点から見た 身体 地域 教育』として小樽商科大学出版会、紀伊国屋から、2009年に出版されている。

私もこれに参加して、一つ気がついた。例えば、ここでの報告で、山崎真紀子が、村上春樹の一小説と多喜二の共有性を、また、王成（中国）が松本清張への発展を、秦剛（中国）が宮崎駿「紅の豚」（アニメーション）との共通性を、発表しているのである。

(7) 反戦的だという点である。「紅の豚」という綽名の戦闘機乗りの話である。

3 井上ひさし

2010年に、井上ひさし（1934年生まれ）さんが、残念ながら亡くなられた。同氏は小樽商大に来て、講話をされたことがある。

私は、招待状が来たので、7月1日に、井上ひさし お別れの会（東京）に参加した。そこで、3人が追悼の講話をしたが、初めに丸谷才一が次のように語った。

「平野謙は、1930年代初頭の日本文学について芸術派と私小説とプロレタリア文学が並び立っていると見た。この図式は現代にもあてはまるのではないか。

芸術派にあたるものはモダニズム文学で、代表は村上春樹の、アメリカ批評の用語で言えばロ

マンスでしょう。私小説は、作家身の事情に好んで材を取るという意味で、大江健三郎ではないか。そしてプロレタリア文学を受け継ぐ最上の文学者は、井上ひさしに他ならない。その志は一貫して権力に対する反逆であり、常に弱い者の味方であった。」^⑧

井上ひさしの最後の戯曲は、「組曲 虐殺」であり、地下活動時代の小林多喜二を取り上げている。これは、初め雑誌『すばる』2010年1月号、に出た。その後、集英社で単行本として出版された。

NHK教育テレビで6月、夜1時間、井上ひさし特集が放映された。そこでは、井上ひさしと、この戯曲の関係が特に浮き彫りにされた。興味ある点は、彼の父・修吉が、小林多喜二と同じ作家同盟に、郷里で加わっていたこと、作家志望であったこと、父が書いた文が、雑誌『戦旗』に出ていたことである。かれも弾圧で、35才で、若くして亡くなった。そこで井上は、父と小林多喜二とを重ねたのではないかというのである。この番組は、新しくDVDとして作られるとのことである。

井上の父は、山形県五色温泉での有名な再建共産党の大会のために力を貸した。^⑨

井上さんは、小樽市民大学で講演のために来樽された。ついでに小樽商大で講話をされたのである。内容は小林多喜二についてであった。だから、このころから少なくとも小林多喜二について深い関心を持っていたのである。まさかこれが後に、「組曲 虐殺」になるとは思いもしなかった。当時、大規模な警官増員計画があったこと、小林多喜二がつかまつたときの事、米の話、などを話された。

井上夫人が、北大で、当時の小樽商大の学長・山田家正さんに教わったというので、井上さんは、「恩師なので、来ないわけにはゆきませんよ」と冗談をいっていた。

私はちょうど、小林多喜二の伝記を書いている最中だったので、後に抜き刷りを全部井上さんに送った。それで2通葉書を戴くことになった。

井上さんとは、会った時は、あまり小林多喜二の話はしなかったが、特に文章論で話をした。私は、井上ひさし『私家版 日本語文法』を高く評価していて、ここで井上は、文章論で最も重大な点をついた。井上は、あらゆる文章を、伝達文と表現文に分けたのである。これは卓見である。ここから本当の国語作文教育がでて来るのであって、日本人はこれをほとんど知らないから、作文教育がされていないか、無駄に終わっているのである。

私はそれで、『学生と社会人のための文章読本』（丘書房）を書いたのだった。井上理論が正しいと思っていたので、2人で話が盛り上がった。井上さんは、私が随分話を合わせる人だな、と思ったかも知れないが、私は本当にそう考えていたので、井上さんと意見が一致した。「文章教室にはどこへでもただできて教えますよ」、という熱心さであった。

この時、色紙を数枚頂戴した。「私の色紙は3万円するので、これを書くに宿屋にただで泊まれます」と、井上さんはまた冗談を言っていた。

後に、社会思想史学会が井上さんに講演を頼んだことがあって、私は会員なので、聞いた。2002年10月26日で、演題は「接続語……」であった。費楽屋裏に行って挨拶だけしたら、あなたの「小林多喜二伝」を出版するのに出版社を見つけましょう、と言ってくれました。結局お世話にならなかったが、「親切な人だなあ」、と関心した。私はこれは『小林多喜二伝』（論創社2003年）、として出版した。

井上さんは、「組曲 虐殺」を書くとき、私のこの本から大いに利用したと、間接的に私は聞いている。

(*)この時、会員が会場で不謹慎な態度をとって、井上さんは壇上で怒った。

井上さんの、ある意味で有名な小説の一つは、『吉里吉里人』であり、ユートピア小説である。ある外国の学者が『トーマス・モアのユートピアから吉里吉里人まで』という外国語書を出しているが、大変なものである。『吉里吉里人』は大作である。東北のある村(吉里吉里村)の独立する事件がテーマであり、そこに描かれる物語は壮大で、著者は政治論的に並々ならぬ力を持っている。日本文学史上の名作でもある。それにこれは私小説ではない。ちなみに、吉里吉里語論も、東北弁文法(発音)を知る意味で愉快である。本稿第1節で、「スケールの大きい小説」として注いでいくつか挙げたが、ここに加えることが出来る。

井上ひさし『新釈 遠野物語』は、もちろん、柳田国男の『遠野物語』に挑んだ作品だが、とにかく面白く、柳田の本は軽く吹き飛ばされてしまうだろう。

私より少し若い世代の人は、井上さんをNHKで放映された「ひょっこりひょうたん島」の作者の1人だとして知っている人が多いらしい。

井上の『青葉繁れる』は、社会風刺であり、東大を皮肉っている。これは日本社会にとって冗談ではないことだ。ある人が、日本で革命を起こすには簡単ですよ、東大をなくせばよい、と言っていた。これに照応するのだ。

大江健三郎は、「井上さんの小説『一週間』は、まさに晩年の傑作でした」、^⑧と云う。この長編小説の筋書きはこうである。転向した元党員が、日本の敗戦でソ連のハバロフスクの収容所に抑留され、ソ連と旧日本軍幹部の圧力に抗する正義の人に会い、その後、ソ連の日本語新聞社に選ばれ、旧同志と会い、スリリングな過去の活動を語り合い、次いで、収容所を脱走した日本軍医をインタビューする。その彼は、脱走中診察した老人からレーニンの手紙を借り受け、老人と孫娘の身代わりになって捕まり、収容所に戻ってくる。主人公はこの手紙を譲り受け、これを使って収容所とそのソ連体制と果敢な闘いを繰り広げる。主人公修吉は、井上さんの父の名でもある。この小説は井上さんの父への鎮魂歌でもあるだろう。^⑩

不破哲三との対談『新日本共産党宣言』では、井上さんは不破に遠慮したのだろう。

お別れの会で、井上夫人が、「井上さんは天才です」、とおっしゃっていたが、私もそう思う。

国民的作家・夏目漱石の小説がつまらない^⑨（「坊ちゃん」「こころ」を除いて）とされるが、それと対比すると、井上さんの小説は無条件に面白い。

⑧ 『朝日新聞』2010年7月3日、文化欄。

⑨ 大会について、詳しくは、『五色の雲』を見よ。あるいは私の『小林多喜二伝』。

⑩ 『朝日新聞』同上。

⑪ この作品は非常に面白いものだが、私は、レーニンの手紙の役割を重大視しすぎているように思う。なぜ「一週間」という変哲もない表題をつけたのだろうか。もしかすると、ソルジェニツインの「イワン・デニスヴィッチの一日」をなぞったのかもしれない。それはノーベル賞をもらった小説であるが、『一週間』は、それよりはずっと面白く規模が大きく、スリリングである。

⑫ 最近では夏目漱石も読まれなくなっているらしい。ゼミの学生に聞いたら、つまらない、他に面白い小説がたくさんある、とのことであった。

4 松本清張

丸谷才一の言うように、井上ひさしがプロレタリア文学を創ったとすれば、同じく、前述の王成の報告があるように、松本清張(1909-1992)もそれを創ったのであった。

彼は青年時代に、多喜二の小説を隠れて読んだ。

清張は、一般庶民の喜怒哀楽を描いた。彼は、社会派推理小説の創設者であり、推理小説という分野に限れば、エドガー・アラン・ポー、コナン・ドイル、モーリス・ルブランにも並ぶだろう。

また独自の歴史研究でもすぐれている。『日本の黒い霧』、『古代史疑』、『昭和史発掘』など、である。『黒い霧』の中の1つ、大島の三原山飛行機墜落事件は、当時私は不思議に思っていたが、米軍の航空領域規制のせいだったとは、それを知って腑に落ちたものである。『古代史疑』での1つ、邪馬台国の場所の推定などの議論を読むと、松本清張は知恵者だと思う。

『昭和史発掘』は、二・二六(発音は本来は、大衆的には、にいにいろく)事件関係が最もボリュームがあり、どうしてこれほど詳しく調べたのか不思議であったが、これは重大だったのだ。この書では二・二六事件に至る過程も詳しく、歴史の連続性の紐が解けた。「小林多喜二の死」は新しい資料は利用されていないようだが、彼としては書いておきたかったものだろう。「芥川龍之介の死」は、宮本顕治の有名な論文「敗北の文学」に基づいてそれを少しだけ豊かにした。「スパイM」は当時は随分深く探ったものだった。現在は、小林・鈴木『スパイM』(文芸春秋)で詳しく調査されている。

また『北一輝論』も、北の裏側生活が分かってよかった。これに触発されて私は、北一輝の「日本改造法案」を読んだが、当時の青年が影響されたわけが分かった。

私は清張の推理小説・歴史研究はほとんど読んだ。「梅雨と西洋風呂」は零細企業社長の人間の哀感がでている。「渦」は、視聴率の問題であるが、いまでも不思議である。

『西海道譚綺』は、長編小説で、ロマンで、魅力的な小説である。艶がある。だが、途中で終わっているのではないか。これが完結すると「大菩薩峠」くらいのものになる。前述の「スケールの大きい小説」に入れてもよいだろう。

『暗い血の輪舞』は、オーストリアものである。ゾフィー・ホテックやクーデンホーフ・カレルギー・光子の調べでもある。これも途中で終わっているのではないか。

清張は単に文豪にとどまらない。日本の政治を深く嘆いた。かつて共創(共産党と創価学会のこと)協定を実現した。これはその後、壊れたのであるが、共創連合は必要である。^③

清張は、小説で権力の問題をとりあげ、人間を下からやさしく見る。普通の人が社会に目覚めて行く過程を描く。小説の多くの登城人物は特別の人ではなく、どこにでもいる普通の人が主人公である。

^③ 大体、創価学会が組織しているような階級・階層を本来は共産党が組織するべきだったのだ。思想の違いだけで大げんかをしているのであって、日本ではこういうたぐいの政治で満ちあふれている。こうして日本の支配層に漁夫の利を得させているのである。

5 アンチ・テーゼとしての司馬遼太郎

もっとも、司馬遼太郎^④は、以上のような人々とは全く違うのであり、権力志向の小説だ。それに彼の歴史小説は、現代の講談であろう。これで日本史を学んだという人がたくさんいるが、困りものである。

彼は、天皇制をはぎとってみると日本史がよく分かる、と言う。これは無茶な議論である。それに彼の明智光秀論などは天皇制を軸にしているのだから、彼の議論自体が矛盾してはいないか。

それにまた、後年に至って彼はどうしてお説教ばかりするようになったのだろうか。トシのせ

いだろう。

明智光秀、豊臣秀頼、『最後の将軍』徳川慶喜は、よく書けていると思うが、『燃えよ剣』の土方歳三を、あれほど礼賛することができるのだろうか。小説というのは主人公をベタ誉めすれば事足りると言ってしまうばそうかもしれないが、それにしても批判的視点がなさすぎる。彼の『街道を行く』は、大変好評を得たものだが、『オランダ紀行』には参った。私はオランダに1年半住んでいたの、特に言うのかも知れないが、誰でも知っているような内容で、1冊の本ができあがるとは驚いた。有名作家だから何を書いてもなりたつのだろう。

概して、人生で挫折した人は司馬の小説はとても読めないという。彼の小説は、サラリーマンがいかにして出世しようかという、ハウ・ツーものでもある。私は残念ながら面白く読める。というよりも、さすがに司馬の小説は面白く書かれている。だから「国民的作家」となったのである。「国民的作家」と言っても、同じく国民的作家・夏目漱石とは質が違う。

現在の日本で、司馬を批判すると、白眼視されるほどである。禁煙運動に似ている。

司馬が大変うまい書き手であることを私はここで否定しているのではない。

世界資本主義の社会構造の中で、あるいは日本資本主義の中で、どうしても右派の小説や書物^④は高く評価される。

^④ 佐高信『司馬遼太郎と藤沢周平』光文社、で司馬を分析している。

^⑤ 例えば、イサヤ・ペンダサンの『日本人とユダヤ人』が、内容は全く間違いだらけでも、もてはやされた。だが、浅見定雄『にせユダヤ人と日本人』（朝日文庫）で、著者・山本七平（いざや・ペンダサン）のユダヤ教理解が全く間違っていることが暴露された。

おわりに

プロレタリア小説は、何も、小林多喜二の「蟹工船」や徳永直の「大陽のない町」ばかりではない。